

市民

No

隔月刊 編集・発行《市民》編集委員会 1972年11月



横浜市立図書館



0001935429

視する

八木隆夫 見田宗平 高六郎 武谷三男
田村明 佐藤美紀雄 石口卓 村上彰男
朝倉修 鈴木博之 九谷金保 沖田三請

国土計画のワナ

田村明

国家レベルの計画が一般的なものとして大きくできたのは、もちろん社会主義国においてです。その後、ニューディールであるとか、ドイツでナチがやった国土計画とか、いろいろあったわけですが、日本でも、戦前、ドイツ系の考えかたをとり入れた国土計画論が主流をなしていました。

戦後になって、経済計画、社会計画あるいはフィジカルな国土計画的なのが、いれかわりたちかわり登場してくることとなります。いままで、経済計画だけでも四・五年にひとつの割です。その他に、経済自立計画だとか、新長期経済計画だとか、中期計画だとか、経済社会発

展計画だとか、そういう系統のもの、それに新全総など、どれがどう関係しているのか、まともに答えることのできる人はほとんどいないのではないかと思われるほどです。今後も、そういうぐあいに、二年に一度ぐらいの割で大きな国土計画がでてくるのではないかと思いますが、なぜそういうことになるのか。それぞれの関連性をだれもみきれない、正確に評価もできないのに、どうしてそう計画ばかりでてるのか。

客観的に考えれば、たしかに、ある地域の次元の問題とは別に、全国的に資源配分、土地利用あるいは大きな幹線の問題、たとえば水の配置をどうするかとか考えなければ

ならないものがあると思います。だからといって、二年に一ぺんずつそういうものがあらわれたり、新全総にしても——新全総は七年目で再検討などといっています——そうちよいかえりかえるほどのことはあるのだろうか。国家レベルの計画は、もっと大きな方向性をみきわめていけばいいのであり、そんなに短期間にいろんなものがでてくる必要はないと思います。新全総では、大都市集中みたいなことを一方でいっていて、他方では大規模工業開発ということをいっている。かと思うと、いきなり今度は「日本列島改造論」で大規模工業開発をいう一方、地域中心都市的な考えかたがでてきている。似ているようで、すこしずつちがっている。オーバーラップしている面もあるんだけれども、その関連が説明されなのまま、つぎへつぎへと進んでいる。そんなに無関係にどんどん計画がでてくる必要は、ほんとうはないのです。

色男、金と力はなかりけり——経済企画庁の役割——

なぜこんなにつぎからつぎへ計画ばかりでてくるのかといえば、それは、まともに資源配分ならなんなりのあるべき姿を追求しているところからきているのではなくて、そこには、政治次元の問題が介在してきているということである。国土計画的な開発事業が、政治的にそれなりの意味を

もつようになってきているということ。とすれば、衆議院議員選挙は二・何年に一回の割でありますから、それとあつかあわなないかは別としても、それに匹敵するテンポでなんらかの計画がみえかくれするというかたちにもなるわけです。もちろん、内閣の交替なども大いに関係があるでしょう。そういう政治次元のなかで、計画がひとつのスローガンの役割を演じなければならぬ。というより、計画をつうじて幻想をつぎつぎにつくりだしていかないのだと思います。そういう意味では、国民の生活に関係があるとなかろうと、計画が無限につくられていく可能性もあるといえます。

これらの計画の多くは、経済企画庁がつくっているのですが、ご承知のとおり、経済企画庁は事業官庁ではありません。かといって、各省のやることを完全に総括する能力をもっているわけでもありません。いわゆる縦割り行政のなかで、**「その他各省に属せざる事項」**みたいな感じのことをやっているにすぎないのです。

昔の企画院時代は、実際に、物資統制など、かなり基本的原案をつかまえて、一部では相当のことをやっていたようです。ところが戦後の経済審議庁、いまの経済企画庁になって、数ある省庁のひとつとして、各省がかなり現実的

にいまの問題をやっているのにたいし、いまの問題だけでなく、各省がとりあつかうことができない、ある程度将来の問題、大きな問題をあつかうことをつうじて、なんとなく統一的にいつているような印象を与える役割を専属におわされることとなっています。しかし、実際には、各省庁にたいする統制力はほとんどない。「色男、金と力はなかりけり」というわけです。ただし色男なるが故の役割はあります。ひとつの芝居をするのに、荒っぽい、力の強い男も必要でしょうが、やっぱり看板の色男も必要だからです。政治の舞台で、色男をしたてて、その時々でいるんないい顔つきをして国民にみせてやる、経済企画庁は、そんな役割をさせられてしまっているような気がいたします。

企画庁は、この役割のうえにたつて計画をたてているものですから、なにもそれが具体的な計画であつたり、行政計画であつたりする必要もないのです。問題はイメージづくりにあるのですから、イメージをぼんぼんうちあげて、そのうちあげたものに、だれか食いついてくるものがあるれば、それはそれでひきよせてゆくという発想です。食いつかないなら食いつかないでも、イメージづくりになりさえすればよいのです。大きくまき餌をしている。まき餌のなかで食いつくものはひっぱってゆくことなのです。

いまの政治というものが、かならずしも主導型でなく、強

経済計画のごく局部的な問題の範囲にかぎられていました。最近ではひじょうに広範囲なものになってきて、餌としてもいろいろあるものですから、各省庁がそれに競つて食いついてきています。その食いつきかたもさまざまのものがあつてきます。問題は、そのまき餌が市民レベルとか自治レベルとかにちつともいかにないで、企業レベルであるとか、不動産屋レベルであるとか、中央官庁レベルで猛烈ないきおいで食いつくのが行なわれているということです。日本列島をどうするかという地域問題は、すぐれて市民レベルで、自治体レベルで真剣に考えられなければならないところにきています。そのためにいろんな市民運動も起つてきているのでしようし、革新自治体も前進しているのだと思います。それらが相互に十分な役割をはたしているとはいまだいえないにしても、ともかく地域の問題を市民みずからあるいはすくなくとも自治体ぐらゐのレベルで考えなくてはならないところにきています。客観的背景、すう勢があるのに、「日本列島改造論」は、そのところを素どおりして、大企業とか中央官庁とか、すでに巢食つている怪物どもの餌ばかりを培養してしまつています。もちろん、それが利益になるとねらつてやつたことではしようが、一方において大きな風船をあげ、国民に何かいいことをやつてもらえるのではないかとという期待を抱かせるようなところがあ

力なりリーダーシップでひっぱってゆくということができないものから、こうしたまき餌に食いついてくるものをたぐっていくというやりかたをとらざるをえないのかも知れません。

私もプランナーですが、プランナーという立場からみて企画庁の人たちが、一面そういううごきにのりながら、一面では国民の求めるものをどこかでさがしたいという気があることはよくわかります。かれらにはひっぱってゆく力はない。ですから、国民の動向をみきわめる観測気球をうちあげるなかで、自分たちの考えていることをいくらかでも実現したいということなのでしょうが、実は、もつとうえの政治的次元でとらえかえされて、有効にはたらかされてしまっているのです。

「日本列島改造論」のねらい

「日本列島改造論」などというの、別に行政計画としてでたわけではないし、政府がはつきり発表したものでもない。田中氏が首相になる前に、一個人として出した論にすぎません。それが、なんとなくあいまいなまま——「改造論」はそうした日本人のなあな主義にひじょうによくマッチしたものだといえるかも知れません——さっきいったまき餌の役割をはたしています。以前は、まき餌の範囲も、

るのです。それが、ひじょうに危険です。

だいたい、いまの行政機構をそのままにしておいて、ほんとうに総合的な計画などできるはずがありません。各省庁とも、自分の権限・権益をひろげるうえで有利であると判断したものには、いつでも食いつくという姿勢はあります。その食いつくの間にはいつてしまつて、いちばん困るのは、市民であり、自治体であるということです。

「日本列島改造論」の将来

固定的計画をまず描いて、そこに到達させるといふことは、いまふたつの面から不可能になっています。

ひとつは、まともなプランナーとしての方法論の立場からいえることです。すなわち、マスタープラン的な発想——固定的な、全体的な規模で計画をえがく考えかた——にたつことが、方法論として、現在のようなはげしい変動の時期にはうまくいかないのではないかといいことです。もっと変動のなかで対応できるような計画論でない駄目だということ。近世以来、理想都市ということがいろいろ描かれたわけですが、そして、それはそれなりに意味がないことではないのですが、その後その系統で方法論がうちたてられ、行政的なレベルでも、こういうものがいいんだ、

題から考えても、もっと慎重にならざるをえないはずだ。

方法論の検討からはじめるべきだ

「日本列島改造論」にたいする対案をつくらなくかつくらないとかいふ議論がありますが、いまの情勢のなかで、しよつちゅう揺れうごくような計画をいくらつくってみてもしようがないわけで、そのベースの、計画のつくりかたという議論をもうすこしすべきではないかと思ひます。

その際、何よりもまず前提にしなければならぬことは、地域の人たちが地域についてどう考えているかということだ。「日本列島改造論」は、その意味でひじょうに抽象的に、日本列島は都市に何十パーセントか人間が集まっているので、ただ分散させればいいんだ、みたいな話です。それは抽象論であつて、学生時代の議論です。現実には、すでにあるものはあるのの意を——地域と深くかわりあひながら——もつていふわけですから、そう単純にはゆかないわけです。よく「人口の三二%が国土の1%に住む」などといういいかたがなされますが、それは、日本だけにかぎったことではなく、都市というのは、本来そういう人口集中をもたらずものです。ただ、そうした密集地が他のところでどう有機的な関係をもち、また密集地の

それにむかつて行政は誘導していくんだ、という方法がとられた。ところが、いいんだといつても、その後、世の中がよくなったかといへば、さっぱりよくなつてないんです。そこで、固定的に、まずただひとつ絵をかくことがいかどうかということは、真面目な計画論として反省されはじめていふのです。現実の将来像をフィロソフィーとして抽象的に描くことはともあれ、すくなくともフィジカルに描くことは、ほとんど不可能に近くなつていふます。そこで、何か弾力的な部分を計画論としてもたざるをえなくなくてきています。真面目なプランナーは、おしなべてそこをどうするかということに悩み、模索していふのです。

もうひとつは、政治の次元の話として、いまの真面目なプランナー——企画庁のなかにも、そういう人はいます——の悩みと、「何でもいい、だしときゃいいじゃないか」といふ話が奇妙に癒着するのです。これは、たいへん困つた話です。

ともあれ、どつちから考えても、あらゆる意味で固定的でなしに、今後かなりいろいろなるものが、ずるずるでくると思ひます。それほど責任を負えるような政治体制もできてこないし、純粹に計画論からいつても、とくに日本列島のようなところで、これだ、というふうにいけることはむずかしくなつていふます。

したがつて、「日本列島改造論」が、かなり確信をこめてこれでいいんだといきつていふことについて、それをそのまま信ずることはとうていできません。「改造論」は、新全総のいつていふ大規模工業開発——それでさえ大きすぎるというのに——をそのまま肯定するどころか、またそれを上まわろうというのですから、現実的に計画を考えていふ人は、地域運動の現実などを考えて、そうはいつてもそうはならないだろう、もつといふんなものとの調和を考えながらすすまざるをえない情勢である、ということを知つていふと思うのです。

大規模工業開発自体がそもそも無理になつてきていふのではないのでしょうか。工場追い出し税かなにかで、やたらに金ばかりすいあげて、どこかへいつていいところをこしらえますよ、というのですけれども、金さえあれば何でもできるという世の中ではすでになくなつていふます。

そうしますと、この計画をまともに考えることが、いいことなのかどうか。数年たつと、また新しい計画が出てくることになるのではないか、そう思ひます。いよいよもつてかけがえのない日本列島なのに、「決断と実行」などといわれてしまつて、何を決断し、実行するかもわからないままに、各省が仕事をはじめてしまふといふことは、たいへん危険です。計画論の面からいつても、政治的次元の問

環境をどうするかということが問題なのです。そう簡単に人口は分散などするものではありません。「人口の三二%が国土の1%に住む」などといつたところから論旨を出発させていふところに、基本的な問題があるのです。

私にいわせれば、計画をたてる方法こそ問題であり、地域地域で自分たちのところをどうするのだといふ考えかたを、もつと出させるべきではないかと思ひます。そういう作業が、かつて全然なされたことがありません。いくら聞いたつてきりがないうちかもしれませんが、一へん、二へん、各地域がほんとうに何を考へているのかということ志を聞いてみるという作業をやつてみるべきなんです。志布志湾にしたつて、むつ小川原にしたつて、ああいうかたちでボカツとおろしてしまふというやりかたがいいのか悪いのか。おろす前にもつと地域住民の意見を聞いてみるということをするべきなのではないか、と思ひます。風船を先にあげてしまつて、あとで反応をみるというやりかたには反対です。

また工場を追いだしてどこかにもつてゆくなどという議論はあまりにも抽象的です。すでに根づいていふものは、いろいろな理由があつて根づいていふのであり、根づいたなかで地域社会といふんな関係をもつていふのです。いいこともしたし、悪いこともした、そして悪いことをした企業

をだんだん住民の力であるところまで追い込んでいったというのが、現在の過密地帯における工場と市民との関係です。追い込まれた企業が、逃げだしてよそれにゆけばもっと楽になるのではないか、といったような発想で工場分散を考えているとすれば、今後は出ていった先で地域社会とのバランスをくずすことになるのではないのでしょうか。もっと地域社会になじんできたものなかで、何がたかとうことを考えてみるべきだと思います。

ただ工場はまちにあつてはいけないうつたところで、出ていったさがまちななれば同じわけで、そういう単純なもののみかたをされたのでは困るのです。いままでの地域社会とのなじみかたをじっくりみてもらつて、そのうえで分離したほうがいとなれば分離したらいいのです。その際、かわりに何をはめこむかも議論になるでしょうし、新しい地域社会とのなじみかたのルールについても十分検討されなければならぬわけです。

それから、方法論のなかでもうひとついえることは、これからの日本列島を考える場合、まだ増加する部分が多いわけです。したがって、いまなじんでいるものをどうするよりも、新しくつけ加わるものをどうこうするほうに重

点をおいて考えるべきだと思います。ほんとうにこれだけのをふやさなければいけないのか、どうなのかということをもとに議論すべきで、新全総よりかっこうがいいから、もっと石油精製や鉄鋼生産をふやしてしまおうという単純なことではなくて、ふやす部分をこそ量的にも、質的にも十分検討を加えるべきなのです。いまあるものはあるなりに、何かの意味をもって現実的にどこかに根をおろしているのですから……。もうふやすべきでない、ある安定期に達したから、あとこっちのほうを追いだして全体的にバランスをとりますよ、という時代に達しているのです。それら、それもよいでしょう。ところが何だかだといつても日本列島は、ふえている部分が圧倒的に多いのです。そのふえている部分をうまくおさめて適当な財源などもうるために工場追いだしなどといっているのです。それは、それは、ちよつとまやかします。それは、単なる追いだしの問題ではない。おさめるところでちゃんとおさめる、おさめかたの問題を十分検討しないで、なんで新しいところをおさめることができましょうか。結局これまでと同じことをくりかえすだけになるでしょう。

(たむら あきら・横浜市企画調整室長)



編集後記

▼前号の特集「反日本列島改造論」はたいへんな売れゆきで、勁草書房は、注文在庫が尽ききれないという経験をはじめとしたそうです。それにあやかって……というわけではありませんが、今度も、また「改造論」をとりあげました。前号が総論であるとするれば、今号のは各論ということになりましようか。それは、期せずして、「改造論」が素通りしている日本列島のかげの部分を確認することとなりました。

▼公害、環境破壊が、大きな政治問題となってきたわけですが、その後の政界、財界の動きは、ごく限られた部分の、あえていえば口先だけの「反省」でしかなかったという感が強くします。それでも間近の総選挙は、ブームという名のむさぼりあいと、方向喪失という土壌に生まれる「強王者」期待とによって、巧みに収約されていく

▼この意味で、私たちは、水俣病センター設立運動のもつ《もう一つのこの世を》という提起の意味を考えていきたいと思えます。この世の中で漂々とした旅路に出発した患者さんたちの旅姿は、おそらくあらゆる人と場が《もう一つのこの世へ》の出発点であることを暗示しているのでしょうか。

▼国内法をタテにとった戦車阻止闘争は、その後、中央でのかげひきと、現地での機動隊の制圧にあってかわられてしまったかのようです。法令違反による阻止（不許可）は、もともと市民からは少し遠いところにある手段なのでしよう。手続きがととのえば、こんどは合法化（許可）するということにおいて、闘争の真髄であったベトナム人民虐殺の阻止という市民の側の論理とのズレが、露呈してしまいました。

▼このことで、孤立無援の革新首長をせめる気はさらさらありませんが、なかには一人ぐらゐ、法律上の手段でゆきつまつたら憲法上、国際法上、さらに人道上の理由などをかかげて、断固としてがんばるといふ人がいて、いいのでは、と感じたのはヤジ馬根性なのでしようか。

▼てなことを思っていたら、政府は自

治体の「許可権」をも剝奪することに よって、問題をみずから「純化」してしましました。ベトナム人民の虐殺こそが「日米両国の安全」であるという、田中内閣のこの正直な告白は、また、とりもなおさず日本人民の生活破壊とその受忍の強制こそが、「日本国家と企業の安全」であると、いつまでも表明しようということでもありません。

▼愚直にも、ただギョロ目をむくだけで沈黙しつづけた榮作さん。気さくげにウストラ笑いをうかべて、三百代言を

ばらまく角栄さん。榮作さんは、しまいは切った首の数を数えられました。が、角栄さんはいったウソの数を数えられることになりませんでした。ウソを数えつくされた時に田中さんが《この世の秘密》をどんなふうにかけるのか。《戦車を止める日本市民戦線》が、未生のままに立ち止った正念場なのでしょう。

▼けれども、ウソをつかれたフリをする人びとも多いですね。無邪気どころか同罪だともいふことを肝に銘じて、自戒もいたしましょう。（風船老人）

●次号特集 現代日本の「棄民」

本誌はお近くの書店でお求め下さい。直接ご注文の際は、左記の勁草書房に前金でお申し込み下さい。送料は一部六〇〇円。なおご送金は、振替または現金書留でお願します。

昭和三十七年二月一日発行
定価 三八〇円
編集者 『市民』編集委員会
東京都千代田区六番町一自治労会館
電話(三三)一六四八
振替東京 一三二二九三
発行者 日高六郎
印刷所 浩文社
発売元 勁草書房
東京都文京区後楽二の二三の一五
電話(二二)五三七七 振替東京七五五五

グリーンスタイン著／松原治郎・高橋均訳 子どもと政治

その政治的社会化
四六判 三〇四頁 定価一三〇〇円

児童の政治的知識・関心はどんな性格のものか、児童たちは政治についてどんな学習をしているか、また政治体系に対してどんな関係をもっているかなどを究明。

ジョン・プラムナツ著／田中治男訳（政治の世界①） イデオロギー

四六判 二二〇頁 定価 九〇〇円

イデオロギーという言葉のもつさまざまな重要な意味すべてについて考察する。ドイツ哲学とイデオロギー概念、イデオロギーの政治的効用ほか四編より成る。

M・オッペンハイマー編／長沼秀世訳
アメリカの軍隊 四六判 二四〇頁 定価一〇〇〇円

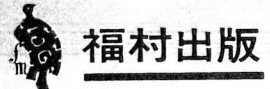
アメリカの軍隊はいかなるものであり、何をしているかを文化人類学・社会学・心理学・経済学・政治学などの面から分析。

エルンスト・ノルテ著／ドイツ現代史研究会訳
ファシズムの時代 四六判 平均二六〇頁 上巻・二二〇〇円 下巻・二〇〇〇円

【全二巻】上巻でファシズムの時代におけるヨーロッパ史を概観し、下巻で各国のファシズム運動を徹底究明した。

リヴァイアサン 四六判 定価七五〇円

近現代国家の生成と挫折―ホッブズと全体主義、レヴィアタン、ジョン・ボタンの近現代国家の成立、ボタンのホッブズと私。



福村出版

東京・文京・本郷 4-23 / 振替東京 78313

近代への哲学的考察

核時代における科学と政治

わたしの日本誌

都市変革の思想と方法

市井三郎 人類の危機ともいふべき現代文明が直面している諸現象を直視し、これをもたらした「歴史の進歩」概念を根底的に批判し、「不条理な苦痛からの脱却」を新しい価値理念として設定する 二〇〇〇円

豊田利幸 現代物理学の最先端をゆく著者が、核兵器の存在とそれを導いた旧い国家観に対し真に科学者として生きる立場から批判し、科学・テクノロジー・政治の関係を根底的に究明した最新論文集 一五〇〇円

山田宗睦 花の文化史―道徳的思想史―野の哲学 現代の管理社会はすべてを同質化する。これに抗し、異質な自然・神と交流した列島常民の精神を再評価すること、豊かな人間性の復位をはかる 一四〇〇円

鳴海正泰 現在横浜市役所企画調整室主幹の立場にあつて革新横浜市政を推進する一方、一貫して自治体改革の理論的・実践的推進のために行政組織内から大胆な発言を続けてきた著者の初の著作 千価一八〇〇円

予約購読受け付けます●

一年間(六冊)二三八〇円(前納)

なお、予約申込みをされる方で、ご希望があれば、バック・ナンバー(一〜七号)を五〇〇円(郵送料込み)でお送りします。

バック・ナンバーのみお求めの方はこれまで通り定価(送料六〇円)でおわけしています。

〈申込先〉『市民』編集委員会

れんが書房 (264) 3520 振東133686

東京都千代田区飯田橋4の9の9